

した戦争が起きたんだろう！ 日本は侵略戦争ではない！」と。当時世界に力のある国々の経済的また対外的圧迫に屈することなく、やむにやまれず立ち上がったのです。

武力には負けましたが、私は戦時中「東洋平和のためならば、なんで惜しかるこの命」と歌にうたったあの頃から、多大の犠牲を払った日本において、私自身、自信と誇りを持っております。これからは民主主義を推進して自由で明るい豊かな日本を深く深く望む者です。

南支派遣軍第十二師団

第一建築輸卒隊員

一 源潭墟にて

佐賀県 成守 宝

昭和二十（一九四五）年二月、分隊長以下我らは広東省清遠県源潭墟において、架橋工事の材料集めの命を受け、毎日深い山中に入つての松の大木伐採の作業だった。

ある日のこと、一日の作業を終え宿営地に帰る。夜になり、足を針で刺すような痛み、衛生兵は「かけ」だろうと言って毎日注射を打ってくれた。四、五日過ぎても足は大きくむくみ、しびれ、苦痛はひどく一睡も出来ない。歩行も出来なくなった。

夜が明けるのを待ち、衛生兵や武装した戦友に見守

られながら、五月三十日、第六十兵站病院「源潭壚療養所」に運び込まれた。途中ひどい雨に遭い、兵站病院に着いた時はびしょりと濡れ、その後は意識不明となり、数日後気がついてみると土間に枯れ草を敷き、それに毛布一枚を敷いて寝せられていた。

隣の患者とは動けば肩がすれあうほどで、十数人が並んで寝ている。私の足の痛みは変わらず、少し動く能耐えられぬほどに痛みは増し、熱もあり、横に寝ている患者は動くことなく目を閉じ眠ったままである。私も「もしまや？」と思うと寒気がし、ぞっとする。死は覚悟している我が身でも、病気では死にたくない。

しばらくすると看護婦が巡回し、病室に入ってきて来て私の前に立ち寄り「お気付きになられたのですか」と。起きようとしたが動く痛みが増し起きることが出来ない。看護婦は「ちょっと待ってください」と言い残し立ち去った。

まもなく軍医が看護婦と共に入って来て診察を始めた。胸を見た後、足のあちこちを強く指先で押す。曲

げようとする。私は歯を食いしばり苦痛をこらえた。看護婦に小さな声で何やらささやいている。看護婦が私に「しばらく待っていてください」と言って軍医と共に出ていった。

一時間もしただろうか、看護婦はタンカを持った衛生兵と共に病室に入ってくるや、私をタンカに乗せ別の病棟に運んでいった。診察の結果、急性多発性関節リュウマチと診断された。病室は古い板や竹で床を張り毛布一枚敷いたもので、これも隣の患者とは肩がすれあうほどに狭い病室で十人ばかり休んでいる。夕方になり、夕食を取りに来るようにとの当番兵の声。私は痛みがひどく歩くことは出来ない。熱も出て、食欲はない。しばらくすると看護婦が注射を打ちに来てくれた。

一夜明け、やはり熱と痛み、じっとしていても苦痛で食欲はない。昼が過ぎ夕方になる。当番兵の声。少しでも食べようと思い、苦痛と戦いながら痛む足を引きずり入っていく途中、小さな板を見付け拾い、その上に食器を乗せ片方の手で体を支えながら病室にたど

り着いた。食べようとした時、突然「敬礼」の声。顔を上げ見ると婦長の巡回である。私の前にて足を止め「貴方は戦友道がない。動けない患者には動ける人が食事を運んでやりなさい」。私は苦痛で歩けず、やっとはいずりながら持ってきたばかり。病室を見回すと、一人の患者が隅で寝ているのが見えた。私は疲れているが、それは言えない。婦長に敬礼した。「行ってきます」古い板を片手に持った婦長は言い残し、病室を去られた。

食事を取りに行ってみると、配膳所では分配を終え当番兵の姿は見えなかった。私は病室に戻り、自分の食器から湯飯器に自分の分を少し入れ、残りを隅の患者の枕元に置いた。患者は顔のみ少し向け、聞き取り難いほどの小さな声で「ありがとうございます」と言う。目には涙が光っていた。

私は床に戻り食べかかったがまだ食欲がない。御飯はお粥ではなく、丸い大豆が入った堅い大豆御飯だった。

後から隅の患者のところに行ってみると、食べた様

子はなかった。一夜明け朝食を持っていき、声を掛けたが返事がない。青白な痩せ細った顔、眠ったように目を閉じて動かない。額に手をやると冷たくなっている。私は驚き看護婦に連絡した。

しばらくして軍医が看護婦を連れ、隅の患者のところに来た。ちょっと見た後立ち去っていき、しばらくして衛生兵がタンカを持って入って来た。隅の患者をタンカに乗せ病室を出た。私はその姿を見送り、我が身を振り返り、他人ごとではないと、私は心寂しく、思わず涙が流れた。その後もあちこちの病室から亡くなったという声の流れ知らされた。

私が退院するまでに、私の病室からは六人の死者が出た。お国のため死は覚悟しているとは言いながら、毎日戦病患者の入院は多く、全快が出来ず亡くなり、衛生兵の手によって病室から去っていく患者も多い。特に入院患者には栄養失調の患者が多く、それに比し衛生兵や看護婦が足りず大変とのこと。療養所の衛生兵には入院患者が全快し、退院する前に何日か応援していた。

その後、不思議なくらいに私の病気は微熱が下がり、痛みが薄らぐと、思いのほか快方が早く退院の日が近づいた。

数日後、私も一週間衛兵勤務に服して応援し、七月十三日退院することになり、横に寝ている患者に今まで私が使っていた古い板を「これを使いな、両手に食器を持つより楽だよ」と言って枕元に置き、「君も早く全快し部隊に復帰されるよう祈る」と手を握り、「頑張らなよ」と言うと言者は「ありがとう」と言っ
ては静かに目を閉じた。患者は近頃だいたい弱っているのが一目で知れる。可哀想でならないが、私としては如何とも出来ない。

病室の皆にも「お大事に、頑張ってくれ」と言い残し、完全武装した私は立ち上がり、婦長の検査を受けるために病室を出た。婦長は、入院した頃、私が他の患者の食事を片方の手に体を支え、痛む足を引きずりながら這って行く姿を見ていたらしく、その時の事をお話しになり、椅子から腰をお上げになり、「本当にありがとうございます。お礼を言います。今日は退院おめでと

う」と私の手を固く握り、「退院後は身体を大事に」と優しい言葉を頂いた。

私は「自分が悪かった。私はあの時は婦長を強く憎み顔すら見たくない時もあった。それなのに、婦長を恨むなんて、お許しください。婦長としての立場や責任をも考えず、部隊は違っても、お互いが遠く故郷を離れ、死を覚悟し、お国のために捧げた身である。私は同じ病室で、食べることが出来ず一人寝ている患者に気付かぬなんて、婦長に私からこそ謝らなければならぬ」と、口には出さねど胸の内は苦しかった。

婦長の前に立つ今日頭が熱くなる。「お世話様になりました。部隊復帰することが出来、ありがとうございます。ありがとうございました」何回となく頭が下がる。婦長はなおも手を強く握り喜んで「ありがとう」と言う。私は敬礼し婦長の部屋を出た。門のところまで来るや足を止め療養所の方を振り返ると、婦長は手を振り見送り下さっていた。私は婦長に敬礼し、我が部隊へと急いだ。

誰からとなく耳にした事だが、部隊本部には、私の死の報告が通知されていたようだった。

二 私の陣中日記

医務室勤務

佐賀県 平 田 哲 造

八月〇日、東山の本部より西村の野戦倉庫に配属となり、訓練と作業に精を出すことになった。

ある日、古参兵殿より、いきなりビンタを取られ驚かされた。また「初年兵、集合！」の声で営外に整列、二列横隊で前列は一步前へ回れ右、向き合った者同士の右と左からの對抗試合だとのこと。また内務班では隣にいた古参兵殿から、夜中にはよく鼻をつままれた。いびきが高くて寝られないと。

○月〇日、ある朝の点呼で週番士官より指名され、軍人勸諭の五カ条の一つ「軍人は忠節を尽くすを本文とすべし」の項を全員の前で滞ることなく暗唱して

ホッとした。

○月〇日、将校当番として、一行五人が森林調査かで随行了した時、この将校から「おまえは何処からか」「ハイ佐賀です」「佐賀県人は進取の気性に富んでいるが食いはぐれが多い」と言われた時には「この野郎」と思ったけれどどうしようもなかった。

○月〇日、増城に派遣された時、慰問団が来て、演芸があった時に浪花節の一節で、「トーフ何処行く、わしや医者通い、何ほ医者に通ったとて、元の豆にはなりはしよまい」「これは劇題のサービスで語りますのは……」というのがあった。今でも宴会など時には美声？を張り上げている。

二月〇日、東山の本部に帰る。隊長への申告が終わり、再度隊長室へ。隣の部隊の木工室勤務を命ぜられた。帰還兵殿との交代だった。半年宿舍備品の補修をし、上等兵に進級した途端、黄疸になり四十六日の練兵休。その後衛兵勤務、夜の広東大空襲で第三監視哨の下番哨長で応援に行ったが、谷川君が戦死し、その夜屍衛兵として一夜を明かした。